八幡事業所　Tel.Fax 672-7595
sawayaka@eagle.ocn.ne.jp
小倉事業所　Tel.Fax 647-3210
sawayakakokura@violin.ocn.ne.jp
HP: http://www.npo-sawayaka.net/

さわやか

2015年11月27日
第２２６号

発行者
特定非営利活動法人
通院介護センター
さわやか

新たな活動の担い手を育む取り組みを探ろう

十一月十五日（日）十時よりウエルとばた三階大ホールにて（社福）北九州市社会福祉協議会の主催による創設五十周年記念北九州市社会福祉大会が開催されました。「さわやか」から四名が参加しました。

十時より記念式典があり、続いて九州大学大学院人間環境学研究院の高野和良教授の『これからの地域づくり～新たな地域福祉活動に向けて～』と題して記念講演がありました。

午前中のプログラム最後にふくし劇団こくら南プチボによる劇団一〇〇回記念公演として『地域のことは地域におまかせ』という福祉ボランティア劇がありました。

パネル展示のコーナーで福祉有償運送について紹介

ウエルとばた二階の交流プラザやイベント広場では、パネル展示や活動支援バザー、ミニステージイベント、スタンプラリーなどの催しがありました。

また一階の広場では、福祉車両試乗体験などがありました。

「さわやか」もパネル展示でボランティア募集を

「さわやか」もパネル展示のコーナーにてパネルの展示とボランティアさん募集のチラシを置かせてもらいました。

十三時よりウエルとばた二階の多目的ホールで、市民ふれあいフェスティバルが開催されました。

これは今年度、市社協創設五十周年を迎えることから記念事業として「北九州市社会福祉大会」と共同で開催されました。

北九州市立大学大学院
マネジメント研究科
准教授　松永裕己氏

地域課題の解決に向けて新たな協働の場を

この会の目的は、社会的孤立や孤独死のような地域課題が明らかになり解決に向けて、分野に特定されることなく多様なボランタリー活動を共に取り組んでいく新たな協働の場をつくり、それぞれの特性を活かした新たな活動の担い手を育む取り組みを探ります。

第一部は北九州市立大学大学院マネジメント研究科准教授松永裕己氏による『新たなボランティア・市民活動の担い手を育むために』と題して基調講演がありました。

パネリストとして高原事務局長が参加

第二部は意見交換会として、コーディネーションに関わる活動者及び実際のボランティア・市民活動者の中から三名をパネリストに迎え、意見交換会が開催されました。

この三名の中に「さわやか」の高原由美事務局長が参加しました。

ファシリテーターを松永裕己氏が務めパネリスト三名の方がそれぞれ意見を述べ、自己紹介からはじまり、ボランティアを始めたきっかけや動機などを話されました。

一人目は、税理士法人TAパートナーズ税理士の相浦圭太氏です。

相浦氏は北九州市生まれ、北九州市立大学卒で、中小零細企業への経営の助言を行っています。

その一方で障がい者へのスポーツボランティア等にも積極的に参加され、就労支援事業所などへのアドバイスなども行っています。

二人目は、北九州市立大学地域創生学群三年の野瀬瑠美氏です。

野瀬氏は戸畑区銀座出身で、小さい時から地域の清掃などのボランティア活動をしています。

高校三年生の時に映画のボランティアやエキストラを経験して、現在大学では「地域の再生と創造」をテーマに勉強中で、最近ではカンボジアでの教育ボランティアやNPOカタリバに参加されています。

※NPOカタリバとは、主に高校生の進路や意欲を高めるため、高校に出張して、キャリア学習の授業を行うボランティアのことです。

三人目は、「さわやか」の事務局長高原由美です。

高原事務局長は平成十二年に「さわやか」に入職し、「さわやか」が平成十五年にNPO法人となってから、事務局長兼コーディネーターとして、「さわやか」を担っています。

続いて「新たなボランティア・市民活動の担い手を育成するシンポジウム」をテーマとして、パネルディスカッションが始まりました。

（裏面へつづく）

事務局より年末年始のお知らせ

12月29日（火）から
1月4日（月）まで
事務局はお休みさせていただきます

ボランティアさん及び利用者の方には
個別にお知らせ致します

共通の悩みを共有して 成長していく事で輪が広がっていく

（表面からのつづき）

松永先生が「先ほどの話の中でボランティアさんの人数が半分に激減したとありましたが、その理由と他にボランティアさんの負担を減らすことや活動を続けてもらえるようなことは何かないでしょうか」と質問されました。

それに対して高原事務局長は「半分に激減した理由として多くの書類提出や二日間の安全運転講習の受講などがありました。

今は市の担当の方と提出書類については、相談させていただいております。

透析患者は週三回通院しないといけません。

終わって帰る時に血圧低下などで公共交通機関を使っての帰宅は難を要します。

私も患者なので患者さんの気持ちが分かります。

ボランティアさんが行けない時などに運転ボランティアをしています。

またボランティアさん同士の交流を深めるための研修交流会を実施しています」と話しました。

シンポジウムの様子

ボランティアさん同士 横のつながりを大事に

それを受けて松永先生が「高原さんから『自分も患者なので、患者さんの気持ちが分かります』という言葉は『共感する』ということです。

その共感の輪をどう広げるかが大事だと思いますが、具体的に何かありませんか」と質問されました。

それに対して高原事務局長が「ボランティアさん同士で共感するということで、毎月『さわやか』新聞を発行し、年に二・三回の研修交流会やバスハイクなどを行ない、交流を深めてみんなで横のつながりを大事にしています。

先日も自動車学校で、安全運転の再認識の意味で講習会をしました」と述べました。

一つの物を作り上げる経験が 横のつながりに

続いて「『共感する』という意味で、野瀬さんはカンボジアに行って横のつながりはできましたか」と質問されました。

それに対して野瀬さんは「カンボジアでのボランティアには、九州内や北九州市内の大学生で構成されたメンバーで学生同士だったので、ボランティアがやりやすかったです。

もう一つ他に北九州市環境修学旅行のバスガイドのボランティアもしています。

他県からお見えになる修学旅行の学生さんに工場の案内やおもてなしなどのツアーガイドです。

横のつながりという意味で、仲間と一緒に一つの物を作り上げるという経験が自分の中で大きなものになりました」と述べられました。

相浦さんの『共感』としては「障害のある方がフルマラソンを完走したいという目標があり、自分たちも走ったことがなく、では一緒にやろうという共通な目標ができたことで共感できたと思います」と述べられました。

次に会場からの質問があり、松永先生が丁寧に答えていました。

（左上に記載）

共感をうむことは とても難しい

最後に松永先生は「先ほどの話にもありましたが、どうしたら送迎ボランティアさんが増えるのかということで私たちは今透析患者さんがどれくらいいるのか分からないし、その患者さんがどのようなニーズを求めているのか分かりません。

それでは共感をうむということは難しいところがあります。

今日はボランティアさんにも共通の悩みがあるので、そこを共有して成長していくようなことをやると輪が広がっていくという話を聞いてとても印象的でした」と述べられました。

意見交換会は十五時五分に終了しました。

質疑応答 ～シンポジウム編～

会場から「地域の役員として、地域の清掃活動をしています。

人が集まって来てくれるようになりましたが、後継者がいません。

どうしたら良いでしょうか」と質問がありました。

それに対して松永先生が「会長さんが全部やるのではなくて、分業したらどうでしょうか。

負担を減らしてやりがいや楽しく出来ることを知らせたらどうでしょうか」と答えられました。

次に「『さわやか』の送迎ボランティアさんが増えてほしい」と会場から声がありました。

それを受けて松永先生は「自分たちの周りや身近に患者さんがいれば分かるけど、なかなか知らないことがあるので、その辺をどう広く知ってもらってなおかつ、どう共感をうむかというところですね。

他の団体の方も今からやろうとしている方も募集する方としても共感をうむということは大事でもあるし、難しいところがあります」と述べられました。